OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	皮肉らしさに関わる要素についての一考察 ： 皮肉表現以外の要素に着目して
Author(s)	太田, いずみ
Citation	日本語・日本文化研究. 2017, 27, p. 216-225
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

皮肉らしさに関わる要素についての一考察
—皮肉表現以外の要素に着目して—

太田いずみ

1. はじめに

皮肉を簡単に定義すると「思っていることと反対のことを言う」であり、古代ギリシャ時代から現在まで広く認識されている。また、このような表現が典型的な皮肉だと言える。例えば、次の例 1 のような発話である。

例 1.［貸していた時計を友達に壊された時の友達への発言］「どうもありがとう。」（作例）

もちろん、この定義ですべての皮肉を説明することができるわけではなく、これに代わる様々な理論が提示されている。主要なものとして、質の格率の違反（Grice 1975）、エコー理論（Sperber & Wilson 1981）、偽装理論（Clark & Gerrig 1984） 、ほのめかし偽装理論（Kumon-Nakamura 他 1995）、暗黙的提示理論（内海 1997, Utsumi 2000）などが挙げられる。これらの研究のように、皮肉研究では、皮肉とはどのような言語行動であるのか、どのような状況でその発言が皮肉と認識されるのか、といった理論的研究が中心となっており、議論は現在も続いている。分野でみると、心理学や認知学の分野で多く扱われているという印象を受ける。また近年では、SNS やネット上のレビュー文書などから誹謗中傷文や皮肉文を自動検出するシステムを構築するといった、情報処理分野での研究も広まっている。ここでは検出システムが、対象文が皮肉であると自動認識するための皮肉のパターンを設計している。そこで考慮されているのが皮肉の表層的特徴である。例えば、使われている語句の評価極性や、対象文の前後の文の特徴といった情報である（磯野他 2013）。このような情報処理分野の研究から、従来の研究ではあまり詳しく見られていなかった知見を得ることができ、これらが今後の皮肉研究、特に皮肉の認知研究を発展させる可能性があるとして注目されている（内海他 2014）。無論、認知のみでなく、皮肉の言語的特徴を明らかにする上でも非常に重要な要素だと言える。実際に、誇張表現（副詞や形容詞）、過剰な敬語使用や感嘆詞といった言語標識を使用することで、皮肉だと認識しやすくなるという結果も出ている（橋元 1989, 内海 1997）。これらは主に皮肉表現として用いられている要素であるが、皮肉らしさを高める要素は皮肉表現のみにしか存在しないのであろうか。先に挙げたように、皮肉文の前後の情報も皮肉の特徴として考慮できるということだが、皮肉表現以外の表層的特徴について詳しく見ている研究は、言語学の分野では見られない。

そこで、本稿では情報処理分野での研究を手がかりに、皮肉表現以外の要素、特に直前と直後の要素に着目し、皮肉らしさに関わる特徴を考察する。本稿で得られた結果から、今後の皮肉研究において、認知以外の観点への示唆が得られることが期待できる。以下、本稿での皮肉、分析方法、結果・考察、まとめと今後の課題という流れで論じていく。

2. 本稿での皮肉

日本語における「皮肉」は 、“irony” や “sarcasm” と訳されることが多く、また、それぞれの概念が完全に一致しているわけではない。本稿では英語で書かれた研究にも触れているが、皮肉と“irony” 及び“sarcasm” 、“irony” と “sarcasm” の違いを明らかにすることが本稿の目的ではないため、一律に「皮肉」として論じていく。また、皮肉は大きく発話自体に皮肉の意図が含まれている言語的皮肉と、その状況自体が皮肉的だという状況的皮肉とに分けられているが、本稿では前者の言語的皮肉を分析対象とする。

次に本稿の皮肉の定義であるが、１節で述べた通り、現在もすべての皮肉に対応する定義は出されていない。本稿では Okamoto（2007b）の皮肉の分類の一部を使用するため、定義も岡本のものに則る。岡本（2004）は、Kumon-Nakamura 他（1995）や Utsumi（2000）の議論を受け、「コミュニケーションの不誠実性理論」を提示した。これについて述べる前に、まず Utsumi（2000）の暗黙提示理論を説明する。Utsumi は皮肉を、現在の発話状況が、話し手の事象に対する何らかの期待が満たされておらず、それに対して話し手が否定的な感情を持っている状況である時、この状況を聞き手に暗示的に提示する発話である、としている。また以下の条件を多く満たしているほど、典型的な皮肉になるという。

⑴ 話し手の期待に婉曲的に言及する。

⑵ 何らかの語用論的な原則に表面上違反することによって語用論的不誠実性を含む。

⑶ 話し手の否定的態度を暗示する。

Utsumi は、⑵ と ⑶ のように語用論的不誠実性を示す要素と、否定的態度を示す要素とを分けている。この区別に岡本は疑問を持ち、むしろ両者は同じ手段で同時に表明されるのではないかと考えた。そして、そのような誠実ではない不自然な伝達はすべて、コミュニケーションの不誠実性として捉えることができるとした（コミュニケーションの不誠実性の例は、表１を参照）。したがって、皮肉は、話し手が、話し手の期待が満たされていない状況において、コミュニケーションの不誠実性が含まれている発話をすることで、否定的態度を間接的に示す発話であると言える。（岡本 2004, 2007a, 2007b, 2010）。

表１　コミュニケーションの不誠実性の例（岡本 2007b, 2010 を基に作成）

評価の逆転
種々の状況解釈（不適切な質問、非現実的仮定）
二事象の並置（対比、類似性の発見、比較）
修辞的技法（比喩、決まり文句、独自の意味合い、誇張）
不適切なスタイル（過剰な丁寧さ、正書法違反、諸符号）
置き換え（話し手、ターゲット[i]の置き換え）
エコー、非言語（音調、ジエスチャー）

さらに、岡本は皮肉を大きく、逆転型の皮肉と非逆転型の皮肉とに分けている。逆転型の皮肉とは、字義上では皮肉の対象に対して肯定的評価をしているが、本心は否定的評価をしているという、評価

の逆転が起こっているものである。皮肉の中でも典型的なもので、例１が、これに当てはまる。それに対し非逆転型の皮肉とは、評価の逆転が起こっていないものである。なお、本稿では分析対象を逆転型の皮肉に限定し、分析を行う。アクセントやイントネーションなどの韻律要素および表情やジェスチャーなどの非言語的要素は、分析対象外とする。

3. 分析方法

3-1. データの収集方法

皮肉のデータは、インターネットで「皮肉」と検索をかけ、ニュース記事のものに限定し、収集した。これまでの研究では、小説の中で皮肉と明示されている表現を利用しているものや、皮肉の特徴を手がかりに、研究者が自ら皮肉と判断した表現を利用しているものが多い。これらには問題点があると言える。前者は皮肉と明示されているが作者が意図的に作ったものであるという点、後者は自然の会話から生まれた皮肉であるが、判断に個人差があるという点である。本稿で使用するニュース記事における皮肉は、意図的に作られたものでなく、自然の会話の中で生まれた表現である。それに加え、第三者が皮肉であると判断した上で公表しているため、より客観性が強く、データとして適していると言える。記事の中には海外のニュースについて書かれたものもあるが、そこに出てきた表現を皮肉と判断した者が日本人である場合は対象とし、皮肉と判断をしている者がその国の者であるものは除外した。これは、皮肉発言をした者が外国人であったとしても、その表現を日本語で皮肉と認識している限り、使用する可能性があると考えられるためである。また、本稿では皮肉表現の前後を分析するため、皮肉表現のみを記載しているものも除外している。

得られた記事から話し手の発話部分を抜き出し、皮肉表現と、その直前または直後の要素との関係性を分析する。

3-2. 分類基準

本稿では評価極性を基にデータを分類する。逆転型の皮肉はポジティブな評価を述べるものであるため、皮肉表現は必然的に肯定的評価となる。直前直後の要素の極性に関しては、国立国語研究所コーパス開発センターの『日本語アプレイザル評価表現辞書 』[ii] を使用し判断した。辞書で否定的評価と分類されている語は否定的評価を表す語とし、それを考慮して文の評価を決めた。

4. 分析結果と考察

皮肉表現（肯定的評価）の直前または直後を見ると、否定的評価又は肯定否定のどちらとも明示されていない非明示的評価が置かれていることがわかった。肯定的評価・否定的評価・ 非明示的評価は、それぞれ以下の要素[iii]を含むものである。

肯定的評価：肯定的評価の意味を持った語彙、表現（「～てくれる」などの恩恵の授受）

例）素晴らしい／楽しい／好き／ありがとう　など

否定的評価：否定的評価の意味を持った語彙、表現（否定形：相手の言動を否定するもの[iv]、禁止形）

例）ダメ／つまらない／嫌い／迷惑　など

非明示的評価：肯定的・否定的の語彙や表現を含んでいない、又は含んでいても疑問形や名詞形のように、肯定否定のどちらなのか断定できないもの

例）良さ／面白い？／良いのだろうか／どうでしょう　など

次に、皮肉表現（肯定的評価）、否定的評価、非明示的評価の位置関係を見ると、以下の三つに分類することができた。

Ⅰ．皮肉表現（肯定的評価）の後ろに否定的評価が置かれているもの

Ⅱ．皮肉表現（肯定的評価）の前に非明示的評価が置かれているもの

Ⅲ．皮肉表現（肯定的評価）に否定的評価が挟まれているもの

以下、Ⅰ～Ⅲについてそれぞれ詳しく分析していく。なお、用例の網掛け部が否定的評価または非明示的評価、下線部が皮肉表現（肯定的評価）であり、記事内で「皮肉」と書かれている文も、併せて載せている。［　］は、筆者による発話までに至る要約である。また、以下で皮肉表現のことを指す「肯定的評価」については「“肯定的評価”」と記述している。

Ⅰ．皮肉表現（肯定的評価）の後ろに否定的評価が置かれているもの

Ⅰに分類された発話として、以下のものがあげられる。

(1)［サッカーの試合前に、ファン同士が衝突したことに対するある選手の発言］

「実にご立派な態度だな。恥を知れ。子供の前で何てザマだ。」と皮肉まじりに吐き捨てたのはボローニャのFWロランド・ビアンキだ。　http://nagaguturisu.com/archives/29673

(2)［ハリーポターシリーズに出演していた俳優が、新たに上映されるスピンオフ映画（その俳優は出演していない）について記者から度々質問されることについて］

「僕は初め、『ありがとう、ジョー(J・K・ローリング：作者)。これでこのことについてたくさんの質問に答えなくてはいけなくなったよ』って思ったね」と皮肉のジョークを言った。

http://news.livedoor.com/article/detail/8080670/

上の(1)(2)は、“肯定的評価”の後ろに否定的評価が置かれているものである。一つの事象に対して話し手の評価が逆転していることがわかるだろう。また、それぞれの網掛け部から話し手の否定的態度が読み取れるため、皮肉だと判断することができる。では、皮肉表現の直後の要素がどのように皮肉らしさと関わっているのだろうか。

まず（2）の場合、「答えなくてはいけなくなった」が否定的評価をしている部分であるが、これは文法表現であるため、『日本語アプレイザル評価表現辞書』には記載されていない。そこで、文法書の『現代日本語文法4』を見てみると、「Vなくてはいけない」は、その事態を実現しなければならないということを表す、と述べられている。（2）は、そこに状態の変化を表す「なる」が「なった」という完了の形で後接しているため、記者の質問に答えるという事態から逃れられない状態だ、とい

う意味合いが読み取れる。この状況は話し手にとって負担であると考えられるため、話し手は否定的な評価をしていると言える。次に、(1)(2)の否定的評価を示す網掛け部、「恥を知れ。子供の前で何てザマだ。」「答えなくてはいけなくなった」であるが、どちらも話し手の否定的評価が断言されている形となっている。これは先に述べた“肯定的評価”が本心ではなく、実際は批判をしているということを伝えるためだと考えられる。しかし、2 節で述べたように、皮肉は話し手の否定的態度を間接的に示す発話である。(1)(2)には、直接的に批判をしている表現が含まれているにも関わらず、十分に皮肉だと判断できるが、これはどうしてなのか。そこで網掛け部を否定的評価だと断定できない形に変え、それによって皮肉らしさに変化が起こるのかを検証してみる。

(1)’「実にご立派な態度だな。恥を知らないのだろうか。子供の前でどんな様を見せているのだろう。」
(2)’「『ありがとう、ジョー(J・K・ローリング)。これでこのことについてたくさんの質問に答えなくてはいけなくなるのかな。』って思ったね。」

(1)’(2)’は(1)(2)の網掛け部に、それぞれ「〜だろうか」「〜のかな」を加えて、話し手が皮肉の対象に対して、直接的に批判をしていない形に変えたものであるが、元の(1)(2)と比べ、皮肉らしさが低くなっているように感じられないだろうか。これは次のように考えられる。逆転型の不誠実性は肯定的評価で示される。Ⅰのように、先に“肯定的評価”がくる場合、その評価が不誠実な評価であるということ示すため（評価を逆転させるため）、その後で話し手の否定的な態度をある程度示した方が、皮肉だと判断しやすくなると言える。しかし、否定的評価をしていると断定できない形では、話し手の本心が肯定か否定なのか判断できず、その結果、皮肉らしさも低くなってしまうのだと考えられる。

以上から、皮肉表現を述べてから否定的評価を述べる場合、否定的評価を直接的に示すことで皮肉らしさが高くなると言える。

Ⅱ．皮肉表現（肯定的評価）の前に非明示的評価が置かれているもの

Ⅱに分類された発話として、以下のものがあげられる。

(3)［公の場に出ることが久々であったお笑い芸人が報道陣に向かって］
「みなしゃんの手のひら返しの早さ！　素晴らしい！仕事熱心だね！」と報道陣にむかって皮肉たっぷりに投げかけ、笑いを誘った。　http://news.yahoo.co.jp/pickup/6153386

(4)［動画投稿で広告収入を得る Youtuber についてお笑い芸人が持論を展開。］
「牛乳いっぱい飲んだりとか、牛乳のお風呂に浸かったり、そんなのが面白いんだ？　凄いね、ネットって進んでるね、やっぱり。」などと皮肉めいた言葉でコメントすると・・・（省略）。
http://news.livedoor.com/article/detail/9690929/

(5)［安部総理が民主党の党首に向かって］
「１９４０年代と現在の世界を同列に扱うのは間違いだ。野党第一党の党首としてそれでいいのか。

さすが民主党だ。」と皮肉たっぷりに反論した。

http://www.sankei.com/politics/news/140714/plt1407140002-n1.html

(6)［現場に報道陣が来るか心配していたが、予想以上に来ていたことについて］

「悔しいけど、報道陣の数を去年は何かといろいろあった指原さんが稼いでくれました。」とHKT への電撃移籍で騒がせた指原に皮肉交じりに感謝していた。

http://www.sankei.com/entertainments/news/130115/ent1301150015-n1.html

(3)～(6)の網掛け部には、ここでは肯定的とも否定的とも断定できない、非明示的評価が置かれていると言える。これは、それぞれが以下のような形になっているためだと考えられる。

(3)手のひら返しの早さ：名詞形

(4)そんなのが面白いんだ？：反語

(5)それでいいのか：反語

(6) 何かといろいろあった：曖昧な表現

形だけを見る限り、決して肯定的に評価しているとは言えないが、批判をしているとも断定できない。しかし、これらは逆転型の皮肉であるため、もし網掛け部が肯定的評価であれば、話し手は批判的でなくなり、評価の逆転も起こらなくなってしまう。そのため、後ろの“肯定的評価”も不誠実性を含まない本心だと認識され、皮肉らしさが低くなる可能性も出てくる。では、網掛け部は否定的評価を含んでいるということなのだろうか。これについて記事の内容を考慮して考察する。まず (3) であるが、これは、お笑い芸人は、売れているときは仕事の依頼が止まらなくなるが、人気がなくなると一気に仕事の依頼が来なくなるということを皮肉っている発話である。ここでの手のひら返しとは、その仕事の依頼をする側の態度のことを示しており、その態度の変化の早さに言及している。芸人にとって仕事がこないというのは好ましくない状況であるため、否定的評価が含まれていると言える。次に (4) だが、話し手はお笑い芸人であり、テレビよりネットの方を評価している人たちに疑念を抱いている。また、「そんなのが面白いんだ？」から少なくとも Youtuber のことを面白いとは思ってはおらず、むしろ理解できないといったところである。よって、網掛け部は「そんなのが面白いんだ？（いや、面白くはない）」という否定的評価を含む反語であると言える。(5) は冒頭で「～は間違いだ。」と既に否定的評価が直接的に述べられているため、こちらも「それでいいのか（いやよくない）」という反語であると考えられる。最後に (6) であるが、ここで皮肉の対象となっている指原は、去年、スキャンダルを起こしており、網掛け部の「何かといろいろあった」は、この指原のスキャンダルのことを指している。この指原のスキャンダルは同じアイドルグループとして活動している話し手にとっては好ましくないことであり、ここでも網掛け部には否定的評価が含まれていると考えられる。以上から、Ⅱの皮肉表現の直前の要素には、否定的評価が含まれているということになる。つまりⅠとは違い、話し手の否定的評価が直接的ではなく、間接的に表されている形となっているのである。以上を踏まえ、Ⅱの議論を進めていく。(3)～(6)では、網掛け部の後ろを見ると、突然“肯定的評価”がきており、前後の繋がりが不自然となっていることがわかる。いわゆる、コミュニケーションの不誠実性が含まれて

いるのである。その上、話し手の皮肉の対象に対する否定的評価も含まれているため、皮肉であると認識することができる。そして、肯定否定のどちらとも断定できなかった網掛け部の発話が、否定的評価をしている発話であったのだと認識されるのである。

ではここで、Ⅰで得られた、話し手が否定的評価を直接的に示すことで皮肉らしさが増すという結果が、Ⅱにも当てはまるのかを検証する。そのために、非明示的評価である網掛け部を否定的評価だと断定できる形に変える。ただし、(6) は網掛け部が修飾節内にあり、文の形を変えることができないため、「何かと」を別の語句に変えている。

(3)’「みなしゃん、手のひらを返すのが早すぎる。素晴らしい！仕事熱心だね！」
(4)’「牛乳いっぱい飲んだりとか、牛乳のお風呂に浸かったり、そんなのは面白くない。凄いね、ネットって進んでるね、やっぱり。」
(5)’「１９４０年代と現在の世界を同列に扱うのは間違いだ。野党第一党の党首としてそれではダメだ。さすが民主党だ。」
(6)’「悔しいけど、報道陣の数を去年はスキャンダルがあった指原さんが稼いでくれました。」

(3)’～ (6)’が、網掛け部を直接的に否定的評価を述べている形に変えたものである。否定的評価を直接的に述べることで、Ⅰでは皮肉らしさが高くなっていたが、Ⅱでは低くなっているように感じられないだろうか。皮肉は話し手の否定的評価を間接的に示す発話である。しかし、ここではその間接的に示す役割を担う“肯定的評価”を述べる前に、既に否定的評価が直接的に述べられている。この時点で、話し手の否定的評価を間接的に示すという皮肉の効果が消されてしまっているため、皮肉らしさが低くなっているのだと考えられる。それだけでなく、否定的評価を直接的に述べた後に、再度、間接的に述べる意図が理解できず、話し手の本心が肯定なのか否定なのか判断するのが難しくなっていると言える。

以上から、皮肉表現の直前に直接的な否定的評価を置いた場合、皮肉らしさが低くなってしまうということがわかった。用例(5)を見ると、発話の冒頭で話し手が否定的評価を既に直接的に述べているのがわかる。しかし、その直後で「さすが民主党だ」と述べてしまうと、先に述べたように皮肉らしさが低くなってしまう。それを避けて皮肉として伝達するために、皮肉表現の前でわざわざ「それでいいのか」と、否定的評価を直接的に述べていない形の発話を置いているのだと考えられる。

Ⅲ. 皮肉表現（肯定的評価）に否定的評価が挟まれているもの

Ⅲに分類された発話として、以下のものが挙げられる。

(7)［郵政民営化の成立に対して］
皮肉たっぷりにいった。「楽しみですねぇ。郵便局はどう変わるのか、厳しく見守りましょう。」
http://www.j-cast.com/tv/2007/10/01011788.html/

(8)［米大統領選に関する、ある女優の発言。］

「選挙戦キャンペーンの彼を見ていた時、ある男性が"ドナルドは最高だ！　だって、僕が思っているけど声を大にして言えない、政治的に正しいとされていないことを全部言ってくれるからね"って言っていたの。それで、"あなたは正しいわ。そんな、政治的に誤っている人物に我が国を代表してもらいたい！　そうしたら最高だもの！"と思っちゃったわ」と皮肉たっぷりに答えている。」　http://news.livedoor.com/article/detail/10669795/

上の(7)(8)は、否定的評価が“肯定的評価”に挟まれているものである。否定的評価は、直接的に述べられている形となっているが、これは、一つ目の“肯定的評価” が不誠実であり、本心は逆の否定的評価をしているということを示すためだと考えられる。その影響で、否定的評価の後に続く“肯定的評価”も不誠実な肯定的評価だと認識できる。“肯定的評価”の後ろに、直接的な否定的評価が置かれているという点で、Ⅰの特徴があると言えるが、否定的評価を含む要素の後ろに“肯定的評価”があるという点で、Ⅱの特徴も持ち合わせている可能性がある。もしⅡの特徴も持っているのなら、網掛け部が非明示的評価であっても皮肉が成立するはずである。そこで、(7)(8)の網掛け部を、直接的な否定的評価から非明示的評価に変え、ⅢにはⅠだけでなく、Ⅱの特徴も備わっているのかを検証する。ただ、(6) と同じく網掛け部が修飾節内にあり、文の形を変えることができないため、網掛け部の語句を評価が非明示的な言葉に変えて分析する。

(7)’ 「楽しみですねぇ。郵便局はどう変わるのか、じっと見守りましょう。」

(8)’ 「それで、"あなたは正しいわ。そんな普通な人物に我が国を代表してもらいたい！　そうしたら最高だもの！"と思っちゃったわ」

(7)’(8)’をみると、元の(7)(8)より皮肉らしさが低くなっているように感じられないだろうか。これは次のように考えられる。(7)’(8)’は、Ⅰの(1)’(2)’と同じく、一つ目の“肯定的評価”の後ろで直接的に否定的評価が述べられておらず、話し手が皮肉の対象に対して批判しているとは断定できない形となっている。そのため、一つ目の“肯定的評価”が不誠実だと伝わらない可能性が高くなる。この影響は二つ目の“肯定的評価”にも及んでおり、その結果、本心と評価が逆転しているという手がかりが明示されなくなり、皮肉らしさが低くなっているのだと言える。

以上から、ⅢはⅡの特徴を持ち合わせていないということがわかる。皮肉表現が後ろにあれば、いつでも、その前に非明示的評価を置けば皮肉らしさが高くなる訳ではないのである。要するに、皮肉らしさに影響を与える否定的評価の形は、その発話の中の、一つ目の皮肉表現との位置関係によって変わってくる、ということである。

“肯定的評価”と否定的評価の位置関係の他に、Ⅲには、ⅠとⅡにはない、皮肉表現が複数あるという特徴がある。“肯定的評価”を複数述べているのは評価の逆転を強調するためとも考えられるが、(7)(8)とも否定的評価は一度しか述べられていない。これは、再度、否定的評価をもってこずと

も、二つ目以降の“肯定的評価”が話し手の本心ではないと認識できるためだと考えられる。もし、再度、“肯定的評価”の後ろに否定的評価をもってくると、それが余計な情報となり、話し手の本心が、肯定か否定なのか判断しづらくなってしまう可能性がある。否定的評価を複数述べることで、皮肉らしさが低くなるおそれがあるということである。

5. まとめと今後の課題

本稿で、皮肉表現以外の要素に皮肉らしさを高める効果があること、さらに、それらは皮肉表現との位置関係によって、表現方法が異なるということが明らかになった。これまでの皮肉研究で主に述べられていた、心理面や認知面のような目に見えない部分だけでなく、表層上の特徴、それも皮肉表現以外の要素にも、皮肉らしさが左右するような影響力があったのである。もちろん、例１のように皮肉表現のみのものもあるが、本稿で見たような皮肉表現以外の要素と合わせて皮肉発話をする場合は、どこで皮肉表現を用いるかで、前後の形にある程度制限がかかるということである。そして、皮肉表現以外の要素があることによって、皮肉表現が、より皮肉らしくなる場合もあるという新たな発見が得られた。

新しい発見と同時に、本稿では先行研究での議論を支持する結果も得られた。それは伝統的定義に対する、「言われたことの反対」「思っていることと反対のことを述べる」だけですべての皮肉を説明することはできない、という批判である。たとえ、本心と逆の評価を述べ、不誠実性を含めていても、その前後の表現のし方に注意しなければ、皮肉と判断できない場合もあるということである。この伝統的定義に関する批判はこれまでの研究でたびたび述べられていることだが、新たな観点で再確認できたということに意味があると言える。

本稿で得られたものは、あくまでも逆転型の皮肉に限られた事例にすぎず、すべての皮肉に当てはまるとは到底言うことができない。他の皮肉にも応用できるかどうか、範囲を広げて調査する必要がある。また、今回見た逆転型の皮肉に関しても、今後、一般的な現象であると主張していくには、さらにデータ数を増やし再検討する必要があるだろう。とはいえ、本稿の結果は、表層上の特徴から皮肉らしさを高める要素を明らかにしたという点で、貴重なものだと言える。

今後、情報処理分野で示唆されている現象を言語学に還元することで、皮肉の認知のみでなく、皮肉を作る上で手がかりとなるような言語的特徴の解明が期待される。

註

[i] 皮肉の対象となっているものを指す。

[ii] 言語資源協会より公開されている『岩波国語辞典第五版タグ付きコーパス 2004』（岩波国語辞典第五版における約 5 万 6 千項目のデータに、形態素・統語構造・照応と共参照、岩波国語辞典自身に基づく語義の情報などを付与したもの）から，評価表現に該当する語，8,544 件が収録されている。文法表現については収録されていない。

[iii] 肯定的評価の意味を持った語彙及び否定的評価の意味を持った語彙は、『日本語アプレイザル評価表

現辞書』に収録されている語のことであり、例に挙げている語もすべて辞書に収録されているものである。

[iv]「知らない」や「分からない」のように、否定形であっても相手の言動を否定していないものは含まれない。

参考文献

磯野史弥・松吉俊・福本文代（2013）「Web 掲示板における皮肉の分類および自動検出」『研究報告自然言語処理（NL）』7, pp. 1-8

内海彰（1997）「アイロニーとは何か？ーアイロニーの暗黙的提示理論ー」『認知科学』4(4), pp. 99- 112

内海彰・松井智子・中村太戯留（2014）「アイロニー研究の新展開」『JCSS Japanese Cognitive Science Society』pp. 49-54

岡本真一郎（2004）「アイロニーの実験的展望―理論修正の試みを含めて―」『心理学評論』47, pp. 395-420

岡本真一郎（2007a）『ことばのコミュニケーションー対人関係のレトリックー』ナカニシヤ出版

岡本真一郎（2010）『ことばの社会心理学』ナカニシヤ出版

佐野大樹 (2011) 『日本語アプレイザル評価表現辞書―態度評価編―JAppraisal 辞書 ver1.0』言語資源協会発行

西谷健次（2000）「アイロニーの言語的特徴」『作新学院大学紀要』10, pp. 289-306

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版

橋元良明（1989）『背理のコミュニケーション　アイロニー・メタファー・インプリケーチャー』勁草書房

Clark, H. H., & Gerrig, R. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General, 113*, 121-126.

Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In: P. Cole & J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.

Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General, 124*, 3-21.

Okamoto, S. (2007b). An analysis of the usage of Japanese *hiniku:* Based on the communicative insincerity theory of irony. *Journal of Pragmatics, 39*, 1143-116.

Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics, 32*, 1777-1806.